

## ドイツ森林史研究の動向と 16 世紀ヴェルテンベルクの森林管理状況

石井 寛

### 1 ドイツ森林史研究の動向

これまでドイツ森林史研究は森林科学の一分野として行われてきた。その代表的な業績として、**Rubner (1967 年)**、**Hasel(1985 年)**、**Mantel(1990 年)**、**Schmidt (2002 年)**などの研究がある。一方、**1970 年代**に入り環境問題に関する関心が高まるなかで、詳細な地域レベルの森林史研究が様々な研究分野の研究者によって行われるようになった。その契機は **1924 年**にズンバルトが著した『近代資本主義』の第 **71 章**で、**18 世紀**ヨーロッパの森林乱伐による木材不足と価格高騰が「資本主義終焉の危機」をもたらしたとしたことに対する **1983 年**の **Radkau** の批判である。そして **1980 年代**後半から研究成果が続々と著書として出版されるようになった。代表的なものをみると、**Allmann (1989 年)**、**Selter (1995 年)**、**Schenk (1996 年)**、**Hohkamp(1998 年)**、**Ernst(2000 年)**、**Grewe(2006 年)**などの研究がある。研究対象とする地域は主として西南ドイツである。

さらに言えば、これらの研究に大きく影響を与えている研究視角としてブリックレが提唱した「共同体主義」がある。ブリックレは中世史、農民運動史の研究者として著名であるが、彼はスイス、ライン川諸州、オランダを通じる地域において共同体論理が存在し、政治支配体制は共同体をベースとしていることを主張している。この点は大土地所有者の論理が貫徹したイギリスや北ドイツとは異なるものである。これらの地域の森林管理をみる場合には、農民を中心とする共同体に着目しなければならない。

### 2 16 世紀ヴェルテンベルクの森林管理状況

ヴェルテンベルクはチロルとともに、早期に領主主導の森林管理が実施されたところとして知られているが、今回の報告では、**Kiess (1958 年)**、**Hauff (1976 年)**、**Warde (2006 年)** の研究成果によりながら、**16 世紀**ヴェルテンベルクの森林管理状況を紹介することとする。主な対象地は **Stuttgart** の西南 **20 km**に位置する **Leonberg** である。

主要点は次の通りである。

ヴェルテンベルクは **1495 年**に公爵領となる。

**Leonberg** の人口は **1598 年**—**27,000 人**で、**1650 年代**—**14,000 人**に減少した。

**17 世紀**の **Leonberg** は **5 つ**の町と **53** の村からなる。森林の **58%**がゲマインデ有。

**17%**が公爵、**6%**が貴族、**19%**その他。

ヴェルテンベルクの森林規制は **1495 年**の土地条例から始まる。公爵の森林を管理するものとして、森林官と保護員が置かれた。**Leonberg** には **1 人**の森林官が配置された。

ゲマインデは森林を含めて諸資源を独自に管理していた。森林管理にはゲマインデの保護員が配置された。

しかしゲマインデ有林に対する領邦国家の規制は徐々に強まり、**1552 年**の森林条例はゲマインデ有林に対しても適用されるようになった。詳細は口頭報告で行いたい。